

〔原著論文〕

聖書の社会保障
社会保障思想の源流－聖書と大乘仏教経典の記述を通じて－
①旧約聖書とアポクリファにみる貧困観と貧困救済思想

増山 道康¹⁾

The source of the social security thought – Through the description of the Bible and Mahayanist Buddhism scriptures

Michiyasu Masuyama¹⁾

Abstract

Unseasonable weather and the famine of the result punish a fate namely human disobedience, and it is described in the Old Testament as a thing letting I reveal glory of God, and a human being bring back to God. With the avoidance of the famine as the general crisis, I do an interesting description with the Genesis about a human effort to reduce the damage as much as possible when famine attacks it. The description that it seems that a reporter may have really experienced it continues. The famine would bring the large-scale damage like that at the underground Hainan coast from west Asia. Make it contents limited in that, and it should pay attention that national relief for the poverty is described. It is mythical description, but the almost all functions of the modern social security system and national = nation relations are listed concretely here.

In the Apocrypha, some ways of thinking for the charity are different from the old promise. The charity brings oneself profit, and, as for objection does not have the sympathy to the unjust work namely poverty, performing it, the claim called the way to the hell is emphasized than an old promise. In addition, the poverty has a qualification to receive pity with that alone, and that I meet the demand, and the wealthy perform charity is required. But a partner giving charity must be a good person. I become, and it is assumed that the person performing charity matches a heart of God with proof of the faith. Such a thought is just inherited in the world of the new contract.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 10 (1) : 5 - 16, 2009)

キーワード：貧困、社会保障、教典

Key words : poverty, social security, the Scriptures

要旨

旧約聖書では、天候不順とその結果の飢饉は神の摂理、すなわち、人間の不服従を罰し、神の栄光を啓示し人間を神に立ち返らせるものとして描かれている。一般的危機としての飢饉を回避し、飢饉がおそった場合にできるだけその被害を少なくするための人間的努力について、創世記では興味深い記述をしている。記者が実際に体験したのではないと思われる記述が続く。それほど飢饉

は西アジアから地中海沿岸に大規模な被害をもたらしたのであろう。その中で、制限された内容にせよ、貧困に対する国家救済が記述されていることは注目すべきであろう。神話的描写ではあるが、ここには、現代社会保障制度のほとんど全ての機能と国家＝国民関係が具体的に記載されている。

アポクリファでは、慈善に対する考え方が旧約とは若干異なっている。慈善は、自らに利益をもたらす、反対

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of social welfare Faculty of health science Aomori Prefectural health university

に不正な業すなわち貧困への同情のない行いは地獄への道という主張が旧約よりも強調される。また、貧困はそれだけで憐れみを受ける資格があり、その求めに応じ富者は慈善を行うことが要求される。但し、慈善を施す相手は善人でなければならない。慈善を行う者は、神の御心にかなうものとなり、信仰の証とされる。こうした思想は、そのまま新約聖書の世界に受け継がれる。

1 はじめに

1) 研究の主題設定と目的

社会保障 (Social Security) は、アメリカで成立した制度であるが¹⁾、その設計思想は、ドイツの宗教改革者マルティン・ルター (Martin Luther) が提起した社会金庫や、17 世紀イギリスの政治経済学者ウィリアム・ペティ (William Petty) が政治算術の中で提案している公的救済案にまで遡ることができる。時代背景により一定の限界はあるものの、これらの意見は、貧困救済や貧困予防について社会全体で取り組むべきだという主張が共通して見受けられる。こうした貧困救済や貧困予防を社会的な問題として捉えることは、国家による救済・予防の制度化、すなわち国家の義務とそれに対応した国民の権利・生存権の原型といえる。

現代福祉国家では、貧困救済・予防の方法として国家による費用の徴収と直接間接の給付、すなわち国家による所得の再分配が当然のこととして行われている。ルターやペティの主張には、こうした点も盛り込まれている²⁾。

中世末期から近代初等にかけて貧困の社会化という考え方や所得再配分という手法が生み出され、現代に至っている源流となる観念思想を捉えることで、現代社会保障の枠組みとしての設計思想が明らかとなる。古代の哲学や伝統的な宗教思想のから、貧困観や貧困救済思想を浮かび上がらせることで、現代社会保障制度の設計思想に接近することができよう。

前述したように社会保障という語はアメリカで生まれた。その中心的な制度である社会保険や公的扶助は、ほぼ 17 世紀以降にイギリスや西ヨーロッパで確立した。これらの国家群は、カトリックかプロテスタントかの違いはあるが、いずれもキリスト教国である。そこで、社会保障の思想的源流を聖書の中に探ることによって現代社会保障の枠組みを規定する設計思想を理解することが可能となると考えることは自然であろう。

実際には、聖書の記述中、社会保障思想に関する部分は、それほど多くはない。旧約聖書の大部分は宗教的戒律に関する記述であり³⁾、新約聖書の大部分は信仰論である。しかしながら、ユダヤ教もキリスト教も人間社会を神の意志の反映として捉えている。人間の社会生活上

の困難が貧困の態様として描かれている。そうした記述を抜き出すことで社会保障思想の原点を明確にとらえることができる。

ドイツの社会学者・哲学者マックス・ヴェーバー (Max Weber) は、契約の書としての旧約聖書の精神として「特徴的であるのは訴訟法、奴隸法、寄留人法であり、その中では、「兄弟愛を示す倫理的な命令は…一般的な箇所では取り扱われているのであるが…やもめ、みなしご、下僕、労働者、寄留者、病人のための広汎な諸社会的保護規定にまで発展拡張されるに至っている」⁴⁾と論じている。

なお、現在のいわゆる福祉国家は、西欧だけに限られた国家群ではない。社会保障は、東アジア、中南米やオセアニア諸国のほとんどの導入されている。そこで、こうした国家群に制度が導入された際の受容の方向・変容を理解するために、とりわけ東アジア諸国が社会保障を制度化した際の制度設計思想を理解するためには、仏教、儒教等の関わりを視野に入れる必要があろう。ここでは、キリスト教典との比較を行うために、大乘仏教経典における貧困観や・貧困救済思想をとりあげる。

宗教典の中の貧困の記述とその救済について概括することが本小論の目的となるが、それは、社会保障という現代に固有な制度が、歴史的に規定されていること、とりわけ民族や地域の文化によって規定されているを検証することにつながる。

この小論では、まず、旧約聖書と外典 (アポクリファ) に描かれた貧困と貧困救済の体制や思想を聖書の直接引用によって概括し、若干の考察を加える。次回 (次の論攷) では、新約聖書と大乘仏教経典の中のそれらを概括する。

2) 引用した基礎文献 (教典) と引用方法

キリスト教典は、聖書 (Bible) と呼ばれるが、三部に大別できる。日本では旧約と新約の二部が一般に知られているが、ローマカトリックや正教 (オースドックス) は、その中間時期の書とされている外典 (アポクリファ) も聖書の一部として尊重している。アポクリファ (新共同訳聖書では、旧約続編) は、ヘレニズムから帝政ローマ初期のイスラエルいわゆるマカベア朝ユダヤ王国時期を背景に編纂されていて、マカベア朝の歴史や当時のユダヤ人の生活・文化・道徳律等が記述されている⁵⁾。

聖書の引用は、日本聖書協会「新共同訳聖書旧約聖書続編付き」によった。但し、ルビについては省略している。また、主として次回以降に参照する大乘経典は、丹治昭義他訳「大乘仏典」中央公論社と中村元「現代語訳大乘仏典」東京書籍による予定である。

聖書中の巻名は、一般的な略称によっているが日本人

に親しまれている日本聖書協会「口語訳聖書」又は「欽定訳聖書」により表記した場合がある。アポクリファの巻名表記については、これまでの流布版であるカトリック版（ボスコ訳）によっている部分がある。

直接の引用箇所は、巻名が明らかな場合は章節表示のみとしているが、煩雑を避けるため引用ページは略している。大乘經典は、経を略し章節表示とする予定である。

一般的な表記とイスラエル、ユダヤを並行して使用する。国名もしくは共同体名としてはイスラエルを、民族名としてはユダヤと表記するようにしているが、聖書中の表記がそれと異なる場合は、聖書表記を優先している。地域名は、一般的な現行地理呼称に従い、エジプト・パレスチナ等を採用しているが、聖書中の表記を優先させた場合もある。

2旧約聖書の中の貧困観と貧困救済

キリスト教信仰の中心は、神による救済である。この世の苦しみは、人間の神からの離反によるものであり、神に帰依した人間のみが救済に与れるとする。旧約では「神はそのなさることをいちいち説明されない」（ヨブ 33.13）が「その日が来れば、主は再び御手を下してご自分の民を買い戻される」（イザヤ 11.11）と記述されている。

1）旧約聖書の貧困観

①モーセ五書、史書

農業生産がほとんど天候に頼っていた時代にあつては、飢饉は定期的に起こった。旧約聖書では、天候不順とその結果としての飢饉は神の摂理、すなわち、神の意志と計画の一部であるとしている。人間の不服従が天候不順をもたらし、人間の不信仰の罰として飢饉が起きる。この一連の態様が神の栄光の啓示であり、人間を神に立ち返らせるものであると描かれている。

創世記から申命記までのいわゆるモーセ五書と、ヨシュア記から歴代誌までは、古代ユダヤの歴史と法制度が記述されている⁶⁾。そこでは、人間の神に対する裏切りと神の報復、人間（とりわけユダヤ人）の神への立ち返りと神の許しが繰り返し描かれている。人間のこの世の苦しみは、原初における人間の神からの離反によるものとされている。富と健康は神の恵みであり、貧困と病気は神の呪いであつた。創世記第 12～17 章に描かれる神とアブラハムとの契約のエピソードは、このような素朴な信仰の記述の一例といえよう⁷⁾。

創世記では、エデンの園を追われるアダムに対して、神は「生涯食べ物を得ようとして苦しむ」（3.17）と言ひ渡す。イスラエルのエジプト寄留の発端となるヨセフによるファラオの夢の解き明かしのエピソードでは、豊

作に続く飢饉の予告を「神がファラオの幸いを告げられる」（41.16）ために仕組まれたとしている。ここでは、飢饉を「神がこのことを既に決定しておられ、…まもなく実行されようとしている」（41.32）神の計画としている。エジプトの飢饉は神の摂理であり、イスラエルを「大いなる救いに至らせる」（45.7）ための試練であつた。

レビ記では、神は、ユダヤ人に対して、神との契約＝神への立ち返りによる豊かさを保障している。逆に、契約の破棄＝神への裏切に対しては、「罪に七倍の罰を加え」（26.18）るほどの神の怒りが下される。

神の言葉を守れば、「わたしの掟に従って歩み、わたしの戒めを忠実に守るならば」（26.3）、「あなたたちは食物に飽き足り、国のうちで平穩に暮らすことができ」（26.5）。「前年の穀物を食べ尽くさぬうちに、…新穀を倉に納めるようになる」（26.5）る。

神の言葉に逆らえば、人は、「衰弱をもたらす熱病にかか」（26.16）り、「あなたたちの誇りとする力を砕き、天を鉄のようにし、地を赤銅のようにする。それゆえ、あなたたちの努力はむなしく、地に作物は実らず、地上の木に実はならぬ」（26.19-20）くなり、さらには、「あなたたちの子どもを奪い取り、家畜を滅ぼ」（26.22）されてしまい、ついには、「国は荒れ果て、町々は廢墟と化す」（26.33 と）いう悲惨な状況に追い込まれる。

同様の記事は、申命記中にもみることができる。神の「法に聞き従い、それを忠実に守るならば、あなたの神、主は、先祖に誓われた契約を守り、慈しみを注いで、あなたを愛し、祝福し」（7.12-13）て、ユダヤ人の人口は増加する。

神が命じた「戒めに、あなたがたがひたすら聞き従」（11.13）うならば、神は、満足できるだけの「穀物、新しいぶどう酒、オリーブ油の収穫」（11.14）を恵む。

しかし、神に背けば「主の怒りが、あなたたちに向かつて燃え上が」（11.17）る。神は「天を閉ざされ…雨は降らず、大地は実りをもたらさず、…あなたたちは主が与えられた良い土地から直ちに滅び去る」（11.17）ことになる。

モーセ五書とダビデ王国史をつなぐヨシュア記、士師記にも神の恩寵としての富と罰（報復）としての貧困や厄災が記述されている。

「あなたたちの神、主が約束された良いことがすべて実現したように、主はまたあらゆる災いをあなたたちにくだし…命じられた契約を破」るならば「速やかに滅び去る」（ヨシュア 23.15-16）。「もし、あなたたちが主を捨て」るならば「あなたたちを幸せにした後でも、一転して災いをくだし、あなたたちを滅ぼし尽くされる」（ヨシュア 24.20）。

士師記では、イスラエルの神との契約への裏切りと立ち戻りが、多くの指導者像（士師）を通して語られてい

る。ここではユダヤ人と既住のパレスチナ諸民族との戦いの勝敗が神の恩寵と罰であるとしているが、戦いに負ければ異民族への服従とその結果としての貧困が避けがたい厄災として降りかかり、勝てば、富と平安を得るという図式が繰り返して描かれている。

ヨシュアの死後神に背く世代が興ったとする士師記の記事では「御業を知らない別の世代が興った…主を怒らせた…彼らを略奪者の手に任せて、略奪されるがままにし」(2.10-14)とされている。その後に士師があらわれ「主の霊が彼の上に臨み、彼は士師としてイスラエルを裁いた。…国は40年にわたって平穏であった」(3.10-11)という事例が繰り返される。

史書各巻は、いわゆるダビデ王朝から、いわゆる捕囚までをほぼ年代順に記述しているが、ここでも神の恩寵としての勝利とそれに伴う富の獲得と平和の継続、神の罰(報復)としての敗北とそれによる貧困や民族の衰退が対照的に描かれている。その歴史を通して、ダビデ王朝自体が神の恩寵であり、その後の南北分裂及び最終的にはイスラエル(北王朝)、ユダヤ(南王朝)の滅亡と捕囚が神の罰であった⁸⁾。

王は、「油を注がれた者」であり、地上における神の代理人ともいえる立場にあった⁹⁾。ダビデの時代に「三年続いて飢饉が襲った。ダビデは主の託宣を求め」(サムエル上21.1)で祈り、下された託宣をイスラエル中に告知し、実行している。それまでの士師に代わり王が神の意志を代行している。王国では、神の恩寵である富の分配が王の権限として行われることになる。

ソロモン王の時期には、「国境はどこを見回しても平和であった。ソロモンの在世中、ユダとイスラエルの人々は…どこでもそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下で安らかに暮らした。…食卓に連なる全ての人々のために、それぞれ一ヶ月分の食糧を調達し、何の不足もないようにした」(列王上5.4-7)との記述がある。

②ヨブ記、詩篇、箴言、哀歌

神への帰依が富裕と平安をもたらし、神からの離反が貧困と不安に至るという素朴な思想から、ヨブ記はかけ離れているように見える。神の恩寵の下にいても厄災が起きる。富裕と貧困と言う状況は、信仰による宗教的解釈を抜きにすれば、個人又はその属する集団の思想信条(神への信頼もしくは不信)とは関係なく起きうることとして記述されている。

神への信頼=恩寵/神への反逆=罰という従来の図式を説く友人らに対して、ヨブは、人間の一生自体が苦難であると主張する。生活の困難の責任は個人にのみ帰されるのではなく、神の側にもあるのではないかという疑問を提出している。

「なぜ、労苦する者に光を賜り、悩み嘆く者を生かしておかれるのか」(3.20)と神に問いかけている。友人らが「人が神より正しくありえようか。」(4.17)と論じ、「神は貧しい人を剣の刃から権力者の手から救い出してください」(5.1)と説得してもヨブはそうではないと主張する。「仮借ない苦痛の中でもだえても…聖なる方の仰せは覆わなかった」(6.10)と反論し、「人は女から生まれ、人生は短く苦しみは絶えない」(14.1)と嘆く。

それだけでなく、「ある人は、死に至るまで不自由なく安泰、平穏の一生を送る。…またある人は死に至るまで悩み嘆き幸せを味あうことはない。」と生まれながらの格差があることを指摘している。ここで初めて貧困が神の罰という観念への疑問が提出されている。

詩篇の多くは、ダビデに仮託されている。その中心的思想は、神の恩寵への感謝であり、前節で見たような素朴な富裕/貧困観によるものが多い。その大半は、神の慈悲と救済に対しての人間の期待と、救済された者の神への感謝をうたっている。

しかし、詩篇の内容はそれに留まっているわけではない。ダビデに代表される王=「主に油を注がれた者」への信頼だけでなく、逆に王を始めとする支配者・為政者への不信、抗議、さらには神への訴えを表している節も多い。これらからは、ヨブ記と同じように、貧困の原因が個人や所属集団の行為の結果であるとうだけでなく、生来の身分、地位や政治の結果といった社会的な問題であるという思想の萌芽を感じ取ることができる。

詩篇の最初には、「いかに幸いなことか神に逆らう者の計らいによって歩まず罪ある者の道にとどまらず…主の教えを愛し…その人のすることはすべて、繁栄をもたらす」(1.1-3)が「神に逆らう者の道は滅びに至る」(1.6)という素朴な観念が率直にうたわれている。神は厄災からの「避けどころ」であり「わたしの運命を支える方」(16.5)で有り、神との契約を守ることによって「測縄は麗しい地を示しわたしは輝かしい嗣業を受け」ることができた。

しかし、(詩篇の)作者は、「なにゆえ、地上の王は構え…主の油を注がれた方に逆らうのか」(2.2)という疑問を抱き、「人々は腐敗している。…善を行う者はいない」(14.1)と嘆き、「豊かな食べ物をお与えください」(17.14)と直接の救済を強く祈願する。こうした表現は、人間の自然な感覚であるが、現代に通じる社会問題の提起とも受け取ることができる。

箴言は、ダビデの嗣子であるソロモンに仮託されている。親が子に説くかたちで道德律が展開されている。ここで展開されている貧困観は、更に一歩進んだものとなっている。箴言全体は素朴な善悪=富裕貧困観が基本となっているが、善の獲得には智慧が必要だという論

調が多く見られる。善を行う者は智慧ある者であり、不義を行う者、不正な者、怠け者は、愚者であると説く。神の一方的な恩寵／報復が富裕／貧困として現れるだけではなく、個人の努力、能力獲得の有無が生活状態や人生に影響を及ぼす。

「浅はかな者は座して死に至り、愚かな者は無為の内に滅びる」(1.32)が、「智慧に耳を傾け、英知に心をかたむけるなら、分別に呼びかける」(2.2-3)ならば「善人の道を行き、神に従う人の道を守ることができよう」(2.20)と子どもに語り聞かせている。智慧を得れば「右の手には長寿を左の手には富と名誉を」(3.16)得ることができる。

しかし、怠惰な者には「貧乏は盗賊のように欠乏は盾を持つ者のように襲」(6.11)かかり「ならず者…悪を耕す(者)…このような者には、突然、災いが襲いかかりたちまち痛手を負う」(6.12-15)ことになる。そこから救済する者はだれもない。

「手のひらに欺きがあれば貧乏になる。勤勉な人の手は富をもたす」(9.17)¹⁰⁾が、それは「智慧ある心は戒めを受け入れ無知な唇は滅びに落とされる」(10.8)のであって、人間の意志と努力がなければ、神の恩寵は、受けられないことになる。

また、貧困の分類が初めて記述される。良い貧困と悪い貧困の別が、描き分けられている。ヨブに対する一つの回答がここにある。信仰を守り正しい生活を送るためにあえて貧困にある場合と、怠惰や悪行によって貧困となる場合を峻別している。良い貧困は、神の正義の実現の対象となり、慈善を受ける権利を持つ。悪い貧困は、神の正義に照らして罰をうけ、慈善の対象とならない。

「貧しい人の耕作地に多くの食料が実っても正義が行われなければ奪われる」(13.23)。こうした結果は避けられるべきであるし、正義は必ず実現されるものである。「どこにも主の目は注がれ善人をも悪人をも見ておられる」(15.3)から最終的には神の手の内で正義は実現する。

善なる貧困は、「乏しくても主を畏れ…超えた打ちを食べて憎しみ合うよりも青菜の食事で愛し合う」(15.15-17)ような生活である。「乾いたパンの一片しかなくとも平安があれ」(17.1)ばよい。良い貧困を「嘲る者は造り主をみくびる者」(17.5)であり、赦されない。「貧乏でも、完全な道を歩む人は」(19.1)は、神の祝福を受ける。「無垢な人々は良い嗣業を受ける」(28.10)資格を持つ。

しかし、怠惰と無知は罰としての貧困である。「貪欲な者は財産を得ようと焦る。やってくるのが欠乏だとは知らない」(28.22)者は呪いを受ける。正義は、「彼らの滅びるさまを見る」(29.16)ことになる。「驕る者は低くされる」(29.23)結果となる。

哀歌は、バビロン捕囚直後のエルサレムを描写した悲しみの挽歌である¹¹⁾。敗戦後の混乱と破壊の惨状と民族の悲哀を格調高く歌い上げているが、戦争による貧困の描写は他を圧倒する。この描写は、第二次世界大戦敗戦直後の日本の状況や、現在も世界各地で見られる民族・地域紛争による難民の状況にそのまま直接的に重ね合わされる。

哀歌の中の貧困は、二重の原因がある。一つは戦争遂行のために強いられた国民の過重な負担であり、もう一つは、敗戦後の勝者の略奪と破壊である。基調としては、神への裏切りがこうした惨状を招いたとする素朴な思想が当然にみらる。また直接的な嘆きが哀歌という名の通り、歌い上げられている。しかし、それ以上に客観的な貧困描写と二重の原因の追及が悲惨さを強調している。

戦争遂行のための「重い苦役」(1.3)は勝利には結びつかず、「苦難のはざまに追い詰められ」(1.3)てしまった。敗戦後は、「民は皆、パンを求めて呻く。宝物を食べ物に換えて命をつなごうとする」(1.11)状況になってしまう。勝者によってエルサレムは「炎となって焼き尽く」(2.3)あれ、「城門はことごとく地に倒れ」(2.9)てしまった。

敗戦直後の日本でも、現在の紛争難民でも最も被害を被るのは子どもである。「幼子も乳飲み子も町の広場で衰えていく」(2.11)、「パンはどこ…母のふところに抱かれ、息絶えていく」(2.12)ことを哀歌の作者は見ているしかない。救済者はどこにもいない。「乳飲み子の舌は渴いて上顎に付き幼子はパンを求めるが、分け与える者もない」(4.4)有様である。

成人も同様で「容姿はすすよりも黒くなり、…皮膚は骨に張り付き枯れ木のように」(4.8)な状態であった。何よりも悲惨なことは、「自分の子供を煮炊きし…自分の食料と」(4.10)するほかはない食糧危機の状況に置かれたことである。

運良く生き残ったとしても、「嗣業は他国の民の者となり家は違法の民の者となった。父はなく、わたしたちは孤児となり母はやめとなった」(5.2-3)状態に置かれたまま生きていくしかなかった。

③預言書

ダビデ王朝成立前後から捕囚からの帰還時期まで、イスラエルには預言者(ナビー)と言われる人々が輩出した。彼らは、未来を予言するのではなく、神の代弁者であった。預言者の言説を中心に預言書が編纂されているが、その中でも、貧困は、神の罰／報復であり、神への立ち返りのきっかけとして記述されている。但し、それは素朴な神の恩寵＝富裕／神の懲罰＝貧困という思想だけでなく、人間の自由意志による行動(自己決定、自

己責任)と神からの問いかけへの応答(response)の結果をも含んでいる。預言書の多くは、詩篇、箴言や哀歌に表出されている貧困の分類や原因、とりわけ怠惰の結果としての貧困を精緻化している。同時にその解決策としての新たな神との契約締結を打ち出している。ここから、新約まで思想的な連続性が認められる¹²⁾。神の愛と人間同士の愛(アガペ=カリタス<KALITAS>)がつながっていく¹³⁾。

イザヤは、「主の言葉を聞け」と繰り返し叫んでいる。神が語る言葉を聞くこと、それに従うことは、行動を伴う。「耳を傾ける」ことは形式的な祈りや贖罪ではない。積極的な善行が重視される。「お前たちのささげる多くのいけにえがわたしにとって何になるのか」(1.11)と神はユダヤ人に語りかけていると訴える。

神に背いた国家は、「無慈悲で、…孤児の権利は守られずやもめの訴えは取り上げられない」(1.23)状態となり、そうなれば「パンによる支え、水による支えをもエルサレムとユダから取り去ら」(3.1)れ、「隣人同士で虐げ合う」(3.5)状況に陥ると警告している。「神に逆らう者に平和はない」(48.22)のである。

しかし、「貧しい人々を憐れんでくださった」(19.13)神は、真に従う者を「贖う」と告げる。神に立ち返れば、「銀を払うことなく穀物を求め価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得」(55.1)ることが可能となる。

エレミヤは、哀歌とは異なる位相で悪は二重であるという。二重性を背信と淫行に喩えている。「(妻が)彼のもとを去って他の男のものと」(3.1)なることは二つの悪である。そうした行為によって「食糧も食い尽くす。…羊や牛を食い尽くしぶどうやいちじくを食い尽くす」(5.17)ような悲惨な状態に追い込まれる。「目があっても見えず、耳があっても聞こえず…心はかたくな」(5.21-23)であるために神に背き続けた結果、貧困、とりわけ飢餓に陥る。貧困は人間の悪行の報いであるが、それは人間自身が意識的に二重の悪を選択した結果であり、神の一方的な懲罰=報復ではない。

「彼らに与えたわたしの教えを彼らが捨て」(9.5)て、「おのおのその悪い心のかたくなさのまま歩んだ」(11.8)ことが原因であり、その結果としての貧困について、神の言葉として、「わたしを呼び求めてもわたしは聞き入れない」(11.14)と告げられ、救済に値しないとされる。

しかし、ここでも、「主は生きておられる」(12.16)と告白し立ち返る者は、再び救済される。個々の人間の行為も、そこからの立ち返りも、それを行う人間の選択と決定(決意)であり、神からの一方的な強制ではない。

個人だけでなく、国家や民族・共同体の行為も神の恩寵/処罰の対象となる。個人の枠を超えて、社会全体の行動が評価の対象となる。哀歌で語られた捕囚への道筋

は、集団としてのイスラエルが神に不信の責任を問われた結果であるが、預言者たちは、その原因を追及している。

エゼキエルは「彼ら(イスラエル)に警告」(3.17)することが、預言者の義務であると宣言している。「悪人に警告して、悪人が悪の道から離れて命を得るよう諭さないなら、悪人は自分の罪ゆえに死ぬが、彼の死の責任」(3.18)は預言者が負うことになる。貧困は結果であるが、悪い結果となる原因が、当事者の責に帰すべきものであっても、介入することで回避できる可能性があるにもかかわらず、介入をしないことに対する責任が問われる。

エゼキエルは、神は、イスラエルの不信をその社会全体の責任として問うと語る。神は、イスラエル自体に絶望しているかのように見える。

「わたしは手を伸ばし、パンをつるして蓄える棒を折り、その地に飢饉を送って、そこから人も家畜も絶ち滅ぼ」(14.13)し、「その中にかの三人の人物、ノア、ダニエル、ヨブがいたとしても、彼らはその正しさによって自分自身の命を救いうるだけ」(14.14)だとの宣告が下る。

同様の記述は他の預言書にも見ることができる。神は、イスラエルを告発し、「この国には、誠実さも慈しみも神を知ることもない…それゆえ、この地は渴きそこに住む者は皆、衰え果て野の獣も空の鳥も海の魚までも一掃される」(ホセア4.1-3)と宣言する。

「平和な者から彼らは衣服をはぎ取る戦いを避け、安らかに行き過ぎようとする者から。彼らは我が民の女たちを楽しい家から追い出し、幼子たちから我が誉れを永久に奪い去る」(ミカ2.8-9)。それは「不正に蓄えた富…不正な天秤…欺く舌」(6.10-12)の結果である¹⁴⁾。ここにいたり、貧困は不公正な社会、正義の行われない社会の当然の帰結として立ち現れてくる。

2) 旧約聖書に描かれた貧困救済

旧約聖書全体を通じて、貧困の救済は親族間や共同体内の相互扶助が原則となっている。より豊かな親族が貧困にある縁者を救済する義務を負っている¹⁵⁾。しかし、貧者が怠惰である場合には、慈善行為は、彼に及ぶことはない。富者は貧者に施す義務があるが、貧者は誠実で勤勉でなければ慈善を受ける資格を持たない。

①創世記-ヨセフの寓話=社会保障の萌芽

創世記第41章から47章にかけての記述は、旧約聖書の中で異彩を放っている。ここでは、全国的飢饉に対し、国家がその支配下にある民衆を直接救助する場面が描かれている。制限された内容にせよ、貧困に対する国

家救済が記述されていることは注目すべきであろう。神話的記述ではあるが、ここには、現代社会保障制度のほとんど全ての機能と国家＝国民関係が具体的に描写されている。

ここには、ユダヤ人のエジプト寄留の発端が記述されているが¹⁰、それと共にエジプト王権の支配の正当性が記述されている。ファラオの支配権の正当性が神の権威からではなく地上の社会契約によるとされていることは社会契約説の萌芽として注目すべきであろう。

ユダヤ人奴隸ヨセフによるファラオの夢の解き明かしは、七頭の牛の寓話として知られている。先にナイルから出てくる肥えた七頭の牛が後から出てくる痩せた七頭の牛に食い尽くされる。良く実った七本の麦穂が実入りが悪い七本の麦穂に飲み込まれる。二つの夢は、豊作の七年と飢饉の七年を意味する。それを防止する方法として、ヨセフは、国家備蓄を提案する。具体的には豊作年に1/5税として穀物を納めさせファラオの管理下に置き、それを飢饉に際して放出する（国民に売り渡す）ことを提案した。

飢饉の激しさは近隣諸国にも及び、エジプトには外国からも穀物を求める人々がやってきたが、彼らにも穀物は売り渡された。更に、飢饉の進行によって、国民はファラオに家畜や農地－当時としては全資産－を引き渡さざるを得ず、こうして合法的にファラオはエジプト全土の支配権を得た。国民はファラオから農地を借り、籽種を給付される代わりに1/5税を納めた。

この寓話から、古代国家の飢饉対策は国家政策として行われたこと、その原資が税であったこと、給付は無償ではなく一定の負担が国民に課せられていたことが読み取れる。また、外国人であっても必要に応じて給付が受けられることも読み取れる。こうした制度の枠組みは、強制的な徴収（税にしても掛け金にしても）と応益または応能負担による給付、内外無差別といった現代社会保障とほとんど同じである。

②モーセ五書－貧困救済の律法規定

いわゆるモーセ5書の中で、社会的弱者に対する慈善や共同体的配慮に言及している部分は多くはない。

出エジプト記には、十戒に続けて各種の掟が記述されているが、その中に人道的律法と銘された節があり、寄留者、寡婦、孤児の保護や貧困への特別の配慮について記述されている。「寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない…寡婦や孤児を苦しめてはならない。…貧しい者に金を貸す場合は、彼に対し高利貸しのようにしてはならない。」(22.20-24)と定めている。

レビ記では、この内容が更に詳細に定められているが¹¹、貧困救済の記述として注目されるのは、落ち穂拾いの規

定であろう。落ち穂拾いの実際は、後述するルツ記で生き生きと描写されている。

「穀物を収穫するときは、畑の隅々まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかなければならない」(19.9-10)と定めている。

外国人保護については、民数記の記述が注目される。ここでは、イスラエルも外国人も区別なく、同じ律法に従うべきであると記述されている。その対価として外国人にもユダヤ人と同じ権利が与えられることになる。「あなたたちのもとに寄留する者や何代にもわたってあなたたちのもとに住んでいる者も…あなたたちの場合と同じようにする。…あなたたちも寄留者も主の前に区別はない。あなたたちも、あなたたちのもとに寄留する者も、同一の指示、同一の法に従わねばならない」(15.14-16)と書かれている。

申命記では、貧困救済のための原資として1/10税の使途が定められている。「三年目ごとに、その年の収穫物の十分の一を取り分け…町の中にいる寄留者、孤児、寡婦がそれを食べて満ち足りよう」(14.28-29)することで、神の祝福が得られるとしている。神への立ち返りだけでなく、救済にあたるのが恩寵を得る方法であるとしていて、積極的な行為が推奨されている。

申命記も人道上の規定として、出エジプト記、レビ記と同様の規定が24章に置かれている。そこでは、権利性に関する記述に注目すべきであろう。また、落ち穂拾いについては、オリーブの実に関する事項が追加されている。権利と義務に関しては、結婚、賃金、親子に関する規定おかれているが、それは、寄留者・孤児・寡婦といった社会的弱者だけが対象となっているのではなく、社会全体に及ぶ普遍的な規定となっている。

「新妻をめとったならば、…一年間は自分の家のために全てを免除される」(24.5)、「賃金は日没前に支払わねばならない」(24.15)、「父は子のゆえに死に定められず、子は父のゆえに死に定められない」(24.16)と規定されている。その上で、特別な配慮として、「寄留者や孤児の権利をゆがめてはならない」(24.17)と定めている。落ち穂拾い条項については、「オリーブの実打ち落とすときは、後で枝をくまなく捜してはならない。それは、寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい」(24.20)という項目が追加されている。

③ルツ記－落ち穂拾いの具体的な描写

旧約聖書中貧しい同胞に対する救済が具体的にどのように行われたかを生き生きと描写しているのは「ル

ツ記」であろう¹⁸⁾。ユダヤ人と結婚した外国人妻が寡婦となり、しかも、イスラエル内にとどまった事例について、親族等がどのような援助をしたかが具体的に語られている¹⁹⁾。

イスラエルで飢饉が起こり、ある夫婦が子を連れて近隣国へ避難する。そこで子は結婚するが、夫と子は死去し、年老いた寡婦（妻）は若い寡婦（子の妻、ルツ）をつれてイスラエルに戻る。ルツは、落ち穂拾いで姑との生計を維持する。ある日、夫の一族の畑で落ち穂拾いをした。その所有者（名はボアズ、ダビデの曾祖父）は、ルツが姑と生活していることは、神の御旨にかなうと言ひ、落ち穂拾いをその畑でのみ行わせる。刈り取った収穫からも穂を抜き取り、ルツに拾わせるように雇い人に指示し、食事を与える。

この説話から、実際には、モーセ五書の規範通りに貧しい寡婦が権利として落ち穂拾いができたとは必ずしも言い難いことがわかる。律法に規定された落ち穂拾いが、実際に貧者の救済として共同体内で行われてはいたが、それによる貧者の収穫は耕作者や農地の所有者の意向によって左右されていたようにみえる。

ルツは姑に「厚意を示して下さる方の後ろで、落ち穂を拾わせてもらいます」（2.2）と言ってでかける。ボアズはルツに最初にあったときに「若い者には邪魔をしないように命じておこう」と親切に言う。また、「麦束の間でもあの娘に拾わせるがよい。止めてはならぬ」（2.15）と雇い人に命じている。

④箴言と預言書における貧困救済－道德律と神の恩寵

箴言では、繰り返し富者の正義として慈善の必要性和それによって神の恩寵が得られることが説かれている。「施すべき相手に善行を拒むな」（3.27）、「慈善は死から救う」（10.2）、「慈しみ深い人は自分の魂を益」（11.17）する。「気前のよい人は自分も太り他を潤す人は自分も潤う」（11.25）「貧しい人を憐れむのは幸い。…善を耕す人は慈しみとまことを得る」（14.15）等、繰り返し慈善の効用を説いている。

それだけでなく、「慈善は国を高め」（14.34）、「指導者に英知が欠けると搾取が増す」（28.16）と、国家による救済が肯定的に記述されている。

預言者もこうした個人の慈善や国家の救済の必要性を語りかけている。イザヤは、神が「善を行うことを学び…搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ」（1.17）と命じていると語る。

エレミヤも、「お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人に血を流さず、異教の神々に従うことなく」（7.5-6）神に従えば、安全な生活が保障されると語っている。ここでは、律法の遵守と神への

信仰が同等のこととされている。前述した二重の悪と重ね合わせれば、二重の善ということができよう。

エゼキエルは、神自身が「自分の群れを探し出し、彼らの世話を」（34.11）し、「傷ついたものを包み、弱ったものを強くする。…公平を持って彼らを養う」（34.16）と宣告していると告げ、神の恩寵としての救済を強調している。

ゼカリアも同様な神の言葉を告げている。イスラエルは、「正義と真理に基づいて裁き、互いにいたわり合い、憐れみ深くありやもめ、みなしご、寄留者、貧しい者らを虐げ」（7.9-10）ないようにすべきであった。神の言葉とは正反対の心を持っていたことが、イスラエルの捕囚につながったと述べている。

3 旧約外典（アポクリファ）の貧困と貧困救済

アポクリファの時代は、アレクサンダーによる世界統一後のいわゆるヘレニズム時代であり、パレスチナは、アンティオコス朝、その後を襲ったセレウコス朝シリアとプトレマイオス朝エジプトの緩衝地帯で、イスラエルも常に両者の間での緊張を強いられていた。時代をやや下るとローマによる干渉もたびたび受けることになる。そうした時代背景が、貧困観やその救済思想にも影響をあたえている²⁰⁾。

そこでは、旧約にある貧困と貧困救済＝慈善に対する考え方とは異なった思想が表れる。神の恩寵＝富裕？神の懲罰＝貧困という対比と、良い貧困／悪い貧困という図式の基本は変わらないが、貧困はそれだけで憐れみを受ける資格があり、その求めに応じ富者は慈善を行うことが要求される。より貧者の権利性と富者の義務性が強くなっている。

1) アポクリファの貧困観

①トビト記

あるユダヤ人の個人の生活と信仰を一部を一人称、一部を三人称で物語っている。この説話では、悪魔や天使ラファエルが実在者として登場する。

この書では、貧困は旧約と同じく、人間の罪の結果として描かれている。「わたしは御前に罪を犯し、あなたの掟に従わなかったのです。それゆえ、あなたは…略奪、捕囚、死を経験させ」（3.3-4）られることになった。怠惰も貧困につながる。「無為に時を過ごせば、財産を失い、ひどい欠乏に陥るから。怠けることは飢えにつながる」（4.13）と記されている。また、主人公は、物語の始めに失明し、物語の最後に視力が回復するが、それを神の恩寵として語っている。

②智恵の書とシラ書（ベン・シラの書）

智恵の書とシラ書は、旧約の箴言に相当する。智恵の書は、箴言と同様に智恵＝正義／不信・偽り＝不義という対比を示している。「智恵は悪を行う魂には入らず」(1.4)、「智恵は人間を慈しむ霊である」(1.6)。

それに対して、「偽りを言う口は魂を滅ぼ」(1.11)し、「神を信じない者は言葉と行いで自ら死を招」(1.16)く。

但し、貧者はそれだけで救済の対象となる。以下の記述は、旧約というよりもむしろ新約の記述に近い。「最も小さい者は憐れみを受けるにふさわしい」(6.6)存在であり²¹⁾、こうした存在自体が知恵の働きとされている。「智恵は、搾取する者の貪欲から彼をかばい」(10.11)、「清い人々の労苦に報いを与え」(10.17)る。

シラ書は、ベン・シラに仮託されていて、日本ではこれまでベン・シラの書として知られていた。序文には律法と預言書の教訓と智恵に関する書物であると記されている。実際、旧約の史書・預言書部分の要約的な箇所も見受けられる。

ここでも智恵は神の賜物であり、臆病や怠惰は災いの源であると説いている。「全ての智恵は神から来る」(1.1)が、「怠惰な者…無気力な者は禍い」(2.12-13)である。

しかし貧困の態様はそれだけではない。怠惰や無気力でなく、能力のない「助けを必要とし、何もできず、貧しさにあえいでいる人」(11.12)も存在する。そうした人々は、神の恩恵を受ける資格を持つ。その場合、「貧困と富は、主が与えるもの」(11.14)であり、「愛と善行の道」(11.15)も神の配慮による。

2) アポクリファの貧困救済策

①トビト記

トビト書では、慈善は、自らに利益をもたらし、反対に不正な業すなわち貧困への同情のない行いは地獄への道であると語られている。トビトは、富者は、貧者に施しを与えなければならないと子を諭す。

「お前の財産のうちから施しなさい。施しをする際には喜んでするのだ。どんな貧しい人にも顔を背けてはならない。…財産に応じて豊かなら豊なりに施しなさい。たとえ、少なくとも少ないなりに施すことを恐れてはならない。…施しはそれをするすべての者にとっていと高き方の御前にささげる善い献げ物となる」(4.7-11)と語りかけ、慈善が富者の義務であり、また神への立ち返り出でもあると説いている。天使ラファエルも「慈善の業は死を遠ざけ、すべての罪を清めます。慈善を行う者は、幸せな人生を送ることができます」(12.9)と勧めている。

慈善を行わず富をため込むことは、死に至ると語り、「よく考えてみなさい。慈善の業をすることがどんな利益を生み、不正を行うことがどんな害をもたらすか」

(14.11)と子を諭している。

②智恵の書とシラ書

智恵の書では、王の責任を説き、智恵による善政を勧めている。「権力は主から、支配権はいと高き方から与えられている」(6.3)のだから、王は「いつまでも治めようよう、智恵を学ぶ」(6.21)必要がある。その結果として「思慮深い王がいれば、民は繁栄する」(6.24)ことになる。

シラ書では、トビト書と同様、慈善が罪の償い＝神の恩恵となると記述している。「水が燃えさかる火を消すように、施しの業は罪を償う」(3.30)。

しかし、これまでとは異なる救済に対する考え方も提出されている。援助される側の条件として、信仰を挙げている。良い貧困と悪い貧困が峻別され、良い貧困のみが慈善の対象とされている。

慈善を施す相手は善人でなければならない。この場合善人とは、同じ信仰を持つ者を指す。「信仰深い人に良い業をなせ。そうすれば報いがある。…信仰深い人に施せ。だが罪人には施すな。不信仰な者には食べ物を拒み、何も与えるな。…不信仰な者に施すあらゆる良い業は、二倍の悪となってお前に返ってくるだろう」(12.2-5)という記述は、旧約に比べてより不寛容である。

また、慈善の態度にも言及している。慈善を行う者は、謙譲の美德を身につけていることが必要とされる。「援助するときは、相手を傷つけるな」(18.15)、「貧しい人には寛容であれ」(29.8)という。さもないと慈善は無駄となる。

4 若干の考察

これまで見てきたように、旧約とアポクリファ全体を通じて、貧困は、人間の神への裏切りに対する罰として下されるものであった。そこに描かれている貧困は、神の摂理としての神の罰であり、神への立ち返りが無い限り、救済されることはない。しかし、神への立ち返りは、単に内心の事柄ではなく、それを行為として示すことが重要であった。神への立ち返りの行動として、他者への憐れみと喜捨が強く要請されている。

農業と牧畜が主たる産業である古代社会では、社会的な一般的危機として飢饉や戦争が繰り返し起きている。人間の力ではそれを止めることはできない。そこから神の恩寵としての富裕と懲罰としての貧困という対比概念が生まれたことは自然な成り行きであった。創世記のヨセフの寓話は、そうした状況を体感した記者によって書かれたと思われるふしがある。

こうした厄災は、特に夫を亡くした女性や親を失った子どもにとっては、生存の危機として立ち現れる。外国

人も含め、彼らは頼りうる家族や保護者を持たない。そこで、部族や氏族といった共同体の直接の援助が重要になってくる。律法書では、繰り返し、現代的な用語で言えば、社会的弱者への配慮、とりわけ食糧の確保について命令をしている。

王朝期になると、王の政策として貧困への対応が行われた。ダビデ王朝時期以降は、富の収集と配分は王の権限であり、一旦王の下に徴収された税が再配分される。現代社会保障での垂直型の徴収・再配分の源流がここにみられる。

王国の被支配者として生活している人々の感覚が素朴に表現されている詩篇では、王の政策や社会関係について素朴な感情や関心が表現されている。為政者への一面での信頼と他面での不信、他人との関係における疎外感や格差による絶望感が繰り返し記述されている。また、現代的に言えば要求（ニーズ）と給付（充足）の原型といえるような箇所もある。箴言では、自助努力（selfhelp）の思想の萌芽も読み取れる。

やがてイスラエル分裂（南北王国）と地域の統合戦争（アッシリヤや新バビロニアといった大勢力による）の中で、国民の多くが徴兵・徴用され、国力は疲弊していった。最終的な国家の消滅（捕囚）時代には、イスラエルは民族丸ごとの貧困状態となっていった。史書の最後に近い部分や預言書の一部には社会全体が貧困化するときには、その中で個人の行為は限界があることがはっきり示されている。

そうした中で、預言者は、神への立ち返りのきっかけとしての貧困や神の恩寵としての貧困、すなわち清貧の思想を提唱し始め、その中で二つ項目が明確になっていく。一つは、貧困の分類であり、他の一つは救貧＝慈善が救済への道であるという思想である。

神に立ち返る、もしくは神への信仰を堅持することによる貧困は良い貧困であり、救済に価する。良い貧困は、智慧の力（神の賜物）の表れであると同時に、人間の意志による選択でもある。それに対して、怠惰や悪行の結果の貧困は悪い貧困であり、救済に価しない。悪行はによる富の蓄積は、最終的には失われ貧困の中に取り残される。

アポクリファでは、貧困の二分類は更に強く意識される。信仰を同じくしない者、不信者は慈善の対象とならないと明記されている²²⁾。ヘレニズム後期から帝政ローマ初期のパレスチナ全体が不安定な状況となっている中で、イスラエル（ユダヤ人）の民族的な自覚が強く打ち出されていて、同じ共同体に属する人々同士の連帯や扶助といった側面が強調されている。

旧約やアポクリファでは貧困に対する社会的責任の所在の追及が徐々に行われていった。また、貧困の解決と

して、神との契約が重視されている。それが、人間行動の道徳律となり、共同体の規範となって、貧困救済の制度が成立していた。神との契約が人間社会に反映し、社会契約が締結され、そこからヨセフの寓話に見られるような一般的な飢饉・災害対策が講じられることになっていった。さらに、自己責任と社会的責任、自助努力と社会的連帯や国家の制度形成といった公的責任の關係に関する原始的ではあるが重要な議論が萌芽的ではあるが示されている。

こうした思想や規範が貧困や格差を社会全体の課題として取り組み、貧困の原因と解決策を政治的な問題として捉えるという現代福祉国家体制に結びついていく。

おわりに

この稿では、新約聖書の中の貧困や貧困救済、キリスト教の貧困観と救済については触れられなかった。次稿でそれを整理し、さらに仏教典との比較を行い、西洋と東洋の貧困観、救済思想の比較を行うことで、社会保障制度設計の差の源流を明らかにしたい。

〔受理日：平成 21 年 5 月 14 日〕

<脚注>

- (1) Sosial Security Act 1934
- (2) 強制徴収（税）かどうか、給付の要件を厳格にするかどうかは、また別の議論である。ルターの社会金庫構想は、都市富裕層の拠出と厳格な給付要件が特長である。ペティは、富裕層の消費が貧者の雇用を生むと考えていた。
- (3) 神との契約は律法として啓示された。それを遵守することが神の哀れみと慈しみを受ける資格となる。「あなたの戒めを理解させ、学ばせてください」（詩篇 119.73）。「私はあなたの律法を決して忘れたことはありません…主よ、あなたの憐れみは豊かです。あなたの裁きによって命を得させてください」（詩篇 119.153-156）
- (4) Weber.M, "Das antike Judentum" 1920、内田芳明訳「古代ユダヤ教」（上）岩波書店 1996、p162、171
- (5) ヘンデル作曲「賞を勝ち得て来るをみゆ」は日本でもよく知られているが、これは、オラトリオ「ユダ・マカベアス」中の一曲であり、オラトリオは、この中に含まれるマカベア書Ⅰを題材としている。また、中世以降の宗教絵画の題材として多く取り上げられている「ユディットによる敵将の首打ち」も、この中の一書であるユデト記が原典である。
- (6) 旧約聖書モーセ五書（律法の書）の内容は、宗教的儀礼、手順の外、社会秩序を乱す者への刑罰と、財産、結婚等民法典がほとんどをしめる。ヴェーバー

は、その内の出エジプト記についてイスラエルの「最古の習慣法の集成」と述べている。「古代ユダヤ教」(上) p135

- (7) 『主はアブラムに現れて、言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える』(創世記 12.7)、『主は、アブラムに現れて言われた…「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。あなたは…アブラハムと名乗りなさい。』(17.1-5)
- (8) イスラエル全土の統一王朝はダビデ、ソロモンの二代しか続かず、その後南北に分裂する。北王朝イスラエルはカリスマ型の王が次々に交代するが、南王朝ユダヤは、ダビデの血統がかりうじて継承される。北王朝は先に滅び、イエスの時代には、サマリアとして知られてる。注(11)を参照。
- (9) 民は王を求め、最後の士師サムエルはそれを好ましくは思わないが、神は容認する。但し、王の権能は神が定めた(サムエル上 8 章)。
王の権能は、1、徴兵と軍備、2、王家と朝廷への徴用、3、農地の支配と家臣への分配、4、1/10 税の徴収(穀物、家畜といった現物納付が主であった)とされた。徴用の具体的な例としては、ソロモンの全国動員が列王記上に記述されている。「その徴用された男子は三万人であった。…また荷役の労働者が七万人、山で石を切り出す労働者が八万人いた」(5.27-29)。
- (10) プロテスタントのカルビン派(フランスにおけるユグノー、イギリスにおける清教徒等)は、神の恩寵のもとでの勤勉を強調し、勤勉の結果としての富の蓄積は公正な(神の恩寵による)成果として与えられた信仰の果実であるとしている。
- (11) ダビデ王朝は、BC1000 年前後に成立したが、926 年頃南北に分裂する。北王朝は 721 年頃滅亡しその約 200 年後 587 年頃に南王朝も滅亡する。背景としては地中海東岸でのアッシリア、その後を襲った新バビロニアとエジプトの支配権争いがある。
- (12) 新約聖書において、イエスに洗礼を受けたバプテスマのヨハネは、イザヤが預言した「荒れ野で叫ぶ者」とされている。マタイによる福音書 3.1-3
- (13) 「いかに美しいことか…良い知らせを伝える者の足は。…平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え、救いを告げ」(イザヤ 52.7) 箇所は福音の預言として知られている。それは「貧しい人に良い知らせを伝え…打ち砕かれた心を包みとらわれた人には自由を…嘆きに変えて喜びの香油」(61.1-3) をあたえる。福音が伝えられるとその人の「心は喜び楽しむ」(66.14) が、同時に人々も共に喜び祝うことになる。
- (14) ここで個別に段落をたてて記述したイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書は、大予言書と言われ、その

後に置かれる一群の預言書は小預言書と呼ばれることが多い。但し、宗教的には、価値の大小はないとされている。

- (15) 親族間の扶養のその具体的な描写は、ルツ記に詳しい。また、共同体内の相互扶助は、モーセ五書や預言書に繰り返し記述されている。
- (16) この部分は、アブラハムによる神との最初の契約に引き続き、イスラエルの 12 部族の発祥譚となっている。
- (17) レビ記 25 章は、土地の売買、金銭貸借、貧者・外国人の保護について詳細に記述しているが、とりわけ安息年(ヨベルの年)の記述が重要であろう。安息年には、全ての貸借が無効となり、奴隷が解放される。神の定めた徳政令といえよう。
- (18) この物語の題名は、子の妻の名がそのまま使われている。女性が主人公である物語でその名が題名となっているのは、他にはエステル記のみである。新約聖書には女性の名を題とする書はない。
- (19) この小巻は、ダビデ王出生譚の一部をなし、ダビデの曾祖父の時代の話となっている。エズラ記に見られるような母血統主義(ユダヤ人は、ユダヤ人の母から生まれなければならない)はここではみられない。捕囚期以降の厳しい血統主義は古代王朝期では強く主張されていなかったことをうかがわせる。
- (20) 本小論では取り上げていないが、エステル記(同名書が旧約にあるが、それとは別の書)の末尾にはブトレマイオス王とクレオパトラの名が記されている。また、マカバイ記 1.2 (マカベウス書 1.2) はアンティオコス朝、セレウコス朝とユダヤのマカバイ家との抗争が描かれている。
- (21) 新約聖書中「最も小さい者こそ最も偉い」(ルカ 9.48) という句を連想させる。
- (22) 社会金庫構想の中でルターは「悪党や悪漢に場を与えないように注意しなくてはならない…怠け者に機会を与えないようにすべきである」と述べている。ルター「山上の教えによる説教」(1530) 徳前義和『宗教改革著作集』第三巻、教文社 1983
この説教では、「どういう生活をしているかを見るようにし」との記述もある。ケースワーク思想の萌芽とすることができる。

< 参考文献 >

※著編者と発行元が同じ場合は省略している
日本聖書教会「聖書-旧約聖書続編付き」(インデックス付き新共同訳) 1987/1988
新教出版社「新共同訳聖書コンコルダンス」1997
Weber.M, "Das antike Judentum" 1920, 内田芳明訳「古

代ユダヤ教」(上) 岩波書店 1996

ルター「山上の教えによる説教」(1530) 徳前義和『宗教改革著作集』第三巻、教文社 1983

Petty.W “Poritical Arithmetick” 1690、大内兵衛・松川七郎訳「政治算術」岩波書店 1955